



# 高皇産霊神社

館山市高井字下宮作一七五



- 宮司：酒井昌義
- 例祭日：九月十四日
- 神事：九月十五日安房国司祭に出祭
- 本殿：瓦葺神明造
- 鳥居：明神鳥居
- 境内坪数：二百四十六坪
- 氏子数：五百三十四戸

## 地域の自慢

江戸期よりの倣いで、莫越山神社の神輿と二基、社旗、五色旗、高張提灯、真榊、猿田彦、奉楽、辛櫃、宮司、役員等と行列を組み、八幡宮へと入祭する祭事を今も続けてきた事が、なにより自慢です。明治二十五年、二代目の神輿を作った以来、何度となく修理修復し、その都度地区の人達の篤い思いが随所に見られる、重く、彫り物が冴える神輿になりました。

毎年夏の八月の第一土曜日には高井地区盆踊り大会が行

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。

## 祭神

高皇産霊尊「高御産巢日神」とも「高木神」「産霊むすび」の文字に示すように天地万物を生成する力を人格化した神。昭和初期に「菅原道真公」を合祀

## 由緒

創建は不詳。鶴谷八幡宮は鎌倉時代に府中から八幡に遷座し、国司祭に於いて莫越山神社の神輿が高井神社で休憩されていた事や、善浄寺の本尊「地藏菩薩立像(鎌倉時代末から南北朝期のもとのとされる)」から鎌倉末から南北朝期あるいは江戸時代後期ごろまでには、現地に遷座したと推察される。石灯笼には、嘉永二年楠見浦石工田原長佐衛門作の銘有り。

## 安房国司祭

高井地区は白張や鯉口シャツに白い足袋、黒字に黄色い高井の字と赤の旭日模様の手甲に白とあずき色の旭日模様の鉢巻を巻いた統一されている衣装になります。近年では神輿大改修した際に四本柱を交換し、交換前の四本柱を木札にして焼印された木札を首から下げるのも衣装の一つとなり皆同じ衣裳に身を包み祭礼が始まります。

やわたんまち安房国司祭へ神輿渡御する際には莫越山神社と二基で出祭するのですが、渡御の際に、天狗とお練り演奏を行いながらの渡御が現在でも伝統行事として行われています。

八月下旬ごろより青年部の演奏者達が神社集会場に集まり、笛・鼓・大太鼓の練習に励み、祭礼当日早朝に奏楽(笛・鼓・大太鼓)をしながらの御霊遷を行い、発興祭が行われています。神輿渡御の際のお練りは笛・大太鼓を演奏しながら天

われています。高井地区の盆踊りは昼から青年部三十名程で準備を行い、夕方から徐々

に地区の方が集まります。焼きそば、イカ焼き、かき氷や金魚すくい、くじ引きなど十種類以上の模擬店には毎年行列が出来き、青年部のメンバーは大忙しになります。子供たちとの交わりがあり青年部のメンバーも忙しいのを忘れながら頑張っています。

また、踊り子たちによる踊りとカラオケ大会など神社の境内には地区の人達を含め、延べ五、六百人程が集まる盛大な盆踊り大会が開催され、区民の良き想い出となる一コマでもあります。

他にも、四月には花見、六月のボーリング大会、七月の高井子供会祭礼、十月と二月にはソフトボール大会などと多彩な行事が行われ、手甲、鉢巻にデザインされている旭日のように、輝きが増す地区でもあります。



地域の人々が一体となって行われる盆踊り大会



「やわたんまち」出発前の晴れやかな輿丁たち



高井・高皇産霊神社(左)と莫越山神社(右) 共に鶴谷八幡宮へ入祭



安全な渡御を祈念した神事



神輿を先導する猿田彦の神



鶴谷八幡宮入祭後、御飯屋に鎮座

狗と一緒に歩いて入祭します。渡御の際は鳥居から境内を走りながら八幡神社前まで行き「さし」ます。次に「さし」たまま安房神社へ向かい更に「さし」、最後に高皇産霊神社御借屋に行き「さし」、それから競うような「もみ」がはじまります。境内では莫越山神輿と高井神輿が神輿歌に合わせて神輿が真横になる程にもみを繰り返します。高井若衆の力強く担ぐ姿は観客を魅了します。二日目の神輿還御は古来の順に還御していき、高皇産霊神社は最後から二番目の九社目に出発します。八幡宮から太鼓の合図と同時に境内へ出て「もみさし」を繰り返し、時間と共に八幡宮を後にして地元高井まで帰ります。高皇産霊神社については来年まで担げないという思いとともに最後の「もみさし」が行われ、高井の神輿「安房国司祭出祭」の終わりを迎えます。